



# JACET通信

大学英語教育学会

September 2000

The Japan Association of College English Teachers

No 124

## 巻頭言

## 英語教育の内憂外患

北海道支部長 栗原 豪彦

今年度より浪田克之介氏のあとをうけて北海道支部責任者の重責を担うことになったが、もとより非才の身ではたして無事に勤まるものか自身いささか心もとないというのが偽らざる心境である。2年の任期中最大の課題は来年9月14日から16日まで藤女子大学（札幌市北区）で開催予定の全国大会である。北海道での開催は10年ぶり、第40回の節目に当たる21世紀最初の記念すべき大会とあって、関係者の力を結集して、なんとか成功させたいものと役員一同気を引き締めているところである。会員諸氏の暖かいご支援をお願いしたい。

顧みると、この10年間はバブルの崩壊に端を発する長期不況のなか、IT革命のうねりが社会の構造変化を促がす一方、高等教育関連では1991年の大学設置基準の大綱化に伴う大学の組織・カリキュラム改革、自己点検・評価の導入による教育目的や教育内容・方法の見直しが行われた。またここ数年は18歳人口の減少による大学淘汰の兆しや大学間格差の拡大など、深刻な状況下であり、昨年のAILA'99Tokyoで実証されたように、JACETの役割がますます重みを増すことは疑いないが、一方において会員数は頭打ち気味で、大学の英語教員全体に占める会員の比率も低いままである。JACET全国大会の量的質的な発展ぶりと熱気には毎度感銘を受けるが、学会のにぎ

わいと現場との落差にはいつも考えさせられる。それにしても、このところ日本人の英語力や英語教育の非効率性に関する議論が一段とかまびすしい。英語の第二公用語論騒ぎにしても、その是非はともかく、ビジネス界やジャーナリストの論調も以前よりはるかに手きびしい。その主張にも頷けるものが少なくないが、批判の矛先は相も変わらず「受験英語」を基軸とする学校の英語教育に向けられ、多様な関与要因、とりわけロジスティックの問題や個人・組織の創意工夫や努力を超えた構造的阻害要因を抜きにした荒っぽい議論にはいささかうんざりさせられる。

まもなく大学全入の時代を迎え、新指導要領の導入、AO入試に象徴される入試の多様化が加速し、学力と動機付けの格差がさらに広がる。差し迫った課題は、学力も学習意欲も低い学生の入学後の手当てや中退、留年する学生の処遇にかかわる。米国を見習ったとおぼしきAO入試にしても、そもそも大学の入学、移動や転編人が柔軟な米国と日本とでは学生の扱いにも学生の意識にも大きな差があることを忘れてはいけない。大学審議会による『大学入試の改善について（中間まとめ）』（平成12年7月）にある「卒業期における質の確保を重視」は、米同式に、入りやすく、卒業しにくくする出口管理を前

提としているが、いざ実行となると問題が多い。第一、留年学生を大量に増やせば、高い授業料を払う納税者たる父母が黙ってはいないだろう。

長期的には、グローバル化とIT革命が大学の概念そのものを根底から変える可能性は否定できない。しかし当面は、ローカルな意識の持ち主である学生に外国語の習得が楽器やスポーツと同様、明確な動機と繰り返しに耐える並々ならぬ努力を要する容易ならざる企てであるというごく当たり前のことをあらためて自覚させることから始める必要がある。一方、教師の側でも応用言語学や脳科学の最新の知見への目配りを怠らず、蛸壺型、名人芸的教授法からの脱却をはかることが求められよう。教育目標、内容、評価法などの点で免疫性のある英語教育プログラムはまずないから、対症療法と長期的対策を組み合わせ地道に改善をはかるほかはない。これにはスタッフの意識改革と協調が不可欠だが、大学ではこのことだけでもいかに実現が難しいことか。道のりはまだまだ遠い。

## 会長報告

会長 小池生夫

8月初旬に文部省中等教育局から「英語指導方法改善の推進に関する懇談会審議経過報告」についての本学会の意見を求められたので、理事、研究企画委員会幹事にはかって意見の具申をした。以下に簡単に報告をする。

- 1 文部省は過去の外国語教育改革に関する審議会の答申を参考にすべきである。
- 2 外国語教授法の工夫の提案はより具体的な改革提案が求められる。
- 3 海外、とくに近隣諸国の外国語教育の実態を調査し、参考にすることがある。
- 4 総合的な言語教育政策がはからなければならない。
- 5 膨大な予算をとるものについては、実現可能な範囲を示し、別途の方策を講じる。
- 6 コミュニケーション能力を育成するためには中、高英語教育の現実の姿を厳しく分析し、不適切な問題に対応しなければならない。そこをえぐりださなければ意味がない。
- 7 それは教員の意識、大学入試準備への多様化、教員のコミュニケーション能力の向上策、クラスサイズの縮小、小、中、高、大の外国語教育システムの一貫性、大学入試の多様化への情報理解、リスニング

テストの導入の確実化など思い切った方法をとることである。それには今回の指導法を含んだ総合政策をたてるべきである。

- 8 小学校の英語教育については、教科としての英語教育を目ざすべきである。中途半端なやり方は失敗を招きやすい。そのための諸政策をとることが望ましい。
- 9 大学の外国語教育は混乱状態である。これを改革し、効果ある方向にもっていくことが急務である。到達目標を明示する。クラスサイズを縮小する。4技能、とくに読む力をつける、国際交流、教員の教授法の改革など諸提案をする。
- 10 国語、外国語など日本人の言語コミュニケーション能力の向上を目ざす言語教育政策を総合的にたてる。なお、本学会は日下実態調査を実施しているが、その結果を公表し、日本人の言語教育の改革案を提示したい。

## 事務局より

代表幹事 小林 ひろみ

- 1 文部省の依頼により「英語指導方法等改善の推進に関する懇談会審議経過報告」に関し、JACETとして意見表明を8月にいたしました。
- 2 KATEの6月大会に岡秀夫副代表幹事、北海道支部からは上野之江氏が参加し、発表を行いました。
- 3 JACET本部に入ってくる情報を会員の皆様にもいち早くお知らせするため、ホームページに事務局のページを新たに設ける予定です。また、海外からの質問等に対処するために英語化が急務となっています。事務局では8月の夏休みのお知らせを、試みに英語でHPに掲載しました。ただし、コンピュータが使われない会員のため、従来の方式も維持します。

## 支部便り

### <北海道支部>

平成12年度役員

- |      |                        |
|------|------------------------|
| 支部長  | 栗原 豪彦 (北海道大学) [新]      |
| 副支部長 | 佐藤 行敏 (北海道工業大学) [新]    |
|      | 森永 正治 (北海道教育大学旭川校) [新] |
| 幹事   | 西堀 ゆり (北海道大学) [新]      |

運営委員 阿部 晃夫 (北海道東海大学)  
 新井 良夫 (藤女子大学)  
 坂内 正 (北星学園女子短大)  
 要 春光 (北海道武蔵女子短大) [新]  
 早坂 慶子 (北星学園大学)  
 加藤 富夫 (北海道教育大学札幌校)  
 河合 靖 (北海道大学)  
 丸川 桂子 (札幌大学)  
 宮町 誠 (札幌学院大学)  
 中屋 晃 (北星学園大学)  
 大場 浩正 (北海道医療大学) [新]  
 尾田 智彦 (札幌大学)  
 佐々木勝志 (北海道文教大学) [新]  
 下宮 英治 (北海道武蔵女子短大)  
 高井 収 (小樽商科大学)  
 上野 之江 (北海学園大学)  
 萬谷 隆 (北海道教育大学函館校)  
 会計監査 戸村 保 (札幌大学)  
 渡辺 一郎 (札幌国際大学) [新]

[支部役員は、2001年度JACET全国大会準備委員会委員を兼担する]

本部関連役員

理事 浪田克之介 (北海道大学) 栗原 豪彦  
 評議員 岡野 哲 岩城 禮三 (北海道文教大学)  
 佐藤 行敏 森永 正治 金谷 茂  
 高井 収 新井 良夫

各担当委員

大学英語教育学会賞委員	浪田克之介
紀要委員	森永 正治
広報・通信委員	坂内 正
電子情報化委員	上野 之江
研究会担当委員	上野 之江
国際交流委員	宮町 誠
JAAL in JACET	(未定)

<東北支部>

役員会

日時：6月10日(土) 12:00-13:30  
 場所：東北学院大

全国理事会報告、1999年度活動報告、決算報告、2000年度活動方針案、予算案、新研究会、その他について

2000年度東北支部大会

日時：6月10日(土) 14:00-17:00

場所：東北学院大

支部総会 (1999年度活動報告、決算報告、2000年度活動方針案、予算案、新研究会、その他)

講演

(1) 小池生夫 (明海大・JACET会長)

「内閣総理大臣への提言：日本の外国語教育改革」

(2) 古谷千里 (planet Lingo Inc. USA、前長岡技術科学大) 「グローバルネットワーク時代におけるCALLの進化—個別化学習の実現—」

シンポジウム

テーマ：「英語教育におけるコンピュータの役割」

司会：村川久子 (会津大)

講師：村川久子 (会津大)

Teaching Pronunciation on Computer Workstations

講師：Tom Orr (会津大)

Computer Applications for University Writing Courses

講師：Mark Friernuth (会津大)

On-Line Chat Applications

畑中孝實前支部長 (東北学院大) から高梨庸雄新支部長 (弘前大) へバトンが渡されてから始めての支部大会が、本部から小池生夫JACET会長 (明海大) をお迎えして開催された。支部総会では活動報告・活動計画案、会計決算・予算案、評議員・研究企画員等新役員の選任などが審議され、全て承認された。新しく三つの研究会 (下記参照) が発足したことも報告され、研究会活動への活発な参加が呼び掛けられた。

総会に続く講演会では、小池会長から日本の外国語教育を抜本的に改革するための提言を伺った。日本の英語教育を取り巻く諸問題の分析と共に、実現が切に待たれる多くの提言が詳細に紹介された。二つ目の講演として、昨年度までJACET電子情報化委員長を務められ、現在は米国の企業でインターネット語学教育アドバイザーとして御活躍されている古谷千里氏にこれからのコンピュータ支援外国語教育 (CALL) のあり方について論じていただいた。CALLの最先端が示され、新しい英語教育の一つの方向が明確に示された。

シンポジウムは会津大の特色ある英語プログラムを運

営しておられる先生方によって行われ、コンピュータを使ったダイナミックな外国語学習の実践例が紹介された。今後の英語教育におけるコンピュータの役割が具体的に示される内容であった。支部大会には、支部会員に加え、一般の方や学生の参加も見られ、多くの人にとって意義深い会となった。

## 8月講演会

日時：8月19日（土）14:00-16:00

場所：秋田大

講演者：Professor David Ingram（オーストラリア・グリフィス大学応用言語学研究所長）

演題：Language Proficiency Assessment and its Application to Communicative Language Teaching

毎年恒例となっている秋田での講演会が今年も開催された。今年度は言語能力評価とその指導法への応用という重要なテーマについての講演であり、例年通り盛会となった。

## 東北支部研究会活動

新しく設立された研究会：

コンピュータを使った英語教育と研究

（代表：成沢義雄 東北学院大、高田諭 東北学院大）

早期英語教育研究会

（代表：石浜博之 聖霊女子短大、佐藤朝青 秋田公立美術工芸短大）

語彙指導研究会

（代表：高梨庸雄 弘前大、千葉元信 宮城工業高専）

活動中の研究会：

英文法研究会

（代表：早坂高則 奥羽大、板垣信哉 宮城教育大）  
（村野井 仁・東北学院大）

## <中部支部>

2000年度 中部支部大会

日時：6月10日（土）

場所：静岡大学教育学部 G棟（午前の部）  
大学会館（午後の部）

大会テーマ：「21世紀における英語教育を問う」

開会行事：司会 竹内政雄（椋山女学院大）

挨拶：菅原光穂中部支部長、船城道雄大会運営委員長  
特別講演：「バイリンガリズムから見た外国語能力」

岡秀夫（東京大学大学院教授）

シンポジウム：「21世紀の英語教育—到達目標と評価」

司会：船城道雄（静岡大）

提案者：Steve Ross（関西学院大）

根岸雅史（東京外国語大）

鎌田修（京都外国語大）

研究発表：

（第1室）

(1) 日中学習指導要領比較からの提言

張冬冬（常葉学院大）

藤田剛正（常葉学院大）

(2) 大学英語教育における発音指導のありかた

川田和子（富士フェニックス短大）

(3) ヨーロッパ連合（EU）における英語教育

—The New EU Education Programmesの視点から—

平尾節子（愛知大）

（第2室）

(1) どこから始まるのか？

—第2言語習得の初期状態

白畑知彦（静岡大）

(2) Setting Up a Virtual Japanese/English  
Homeschool

Andrea Carlson（名古屋大）

古谷礼子（名古屋大）

(3) 『シンデレラ物語』の比較文化論的考察

松原健一（松商学園短大）

（第3室）

(1) 「中高必修語」選定の問題—英和辞典の基本語  
リストに関する一考察—

石川慎一郎（静岡県立大短大部）

(2) 冠詞の誤用—不定冠詞・不定冠詞の過剰使用について

小宮富子（岡崎女子短大）

(3) 外来語の日本語に対する影響—カタカナ語氾濫の  
現状を憂いて—

加藤主税（椋山女学院大）

評議員会

司会：古川寛（中部大）

支部総会

司会：古沢次輔（愛知学院大）

内容：活動報告、活動計画案、会計報告、予算案、  
人事、本部よりの報告

（後藤いく子・東海女子短大）

## <関西支部>

### 2000年関西支部度春季大会

日時：2000年6月10日（土）13時～18時20分

場所：佛教大学紫野キャンパス

プログラム：

- (1) 開会の辞 豊田昌倫（京大）  
会場校挨拶 清水 稔（佛教大文学部長）

- (2) ワークショップ  
「最近の言語研究と英文法—英文法は怖くない」  
司会者：菅山謙正（神戸市外大）  
発表者：家口美智子（神戸市外大院）  
高木宏幸（近畿大）  
村田純一（神戸市外大）

#### (3) 研究発表

##### 第1室

- 発表1. “Complimentary Styles among Women and Men  
—A Contrastive Study between Japanese and  
English—” 岡部浩子（神戸市外大院）  
発表2. 異文化理解教育における学習者の「黒人文化」  
に対する認識度 福屋利信（佛教大院）  
発表3. 「批判的言語意識の育成—イギリスの新聞記  
事を使って」 林 のぞみ（京都大院）

##### 第2室

- 発表1. 「日本の医学・看護学生の医学英語知識に関  
する調査」 玉巻欣子（神戸大医学部・非常勤）  
発表2. 「洋画セリフコーパスの作成と口語英語研究」  
井村 誠（大阪大院）  
発表3. 「『時の副詞文句』を導く接続詞 since につ  
いての考察」 小林清子（佛教大院）

#### (4) 支部総会

#### (5) シンポジウム

「21世紀の大学英語教育を考える—回顧と展望—」  
コーディネーター：大谷泰照（滋賀県立大）  
シンポジスト：実松克義（立教大）

竹前文夫（亜細亜大）  
藤井健夫（関西外大）  
神崎高明（関西学院大）

#### (6) 閉会の辞 前川哲郎（佛教大）

3室の会場に参加者は100名を越える盛況。特に最新の言語研究の成果から英文法を見直そうとするワークショップや転換期の大学英語教育を考えるシンポジウムに関心が集まった。シンポジウムでは関東・関西の4大

学の意欲的な教育改革の現状と展望が披露された。今大会には若い大学院生の参加が目立ったが、学会のためにはよろこばしいことである。

閉会后、佛教大学のご厚意により、5号館の食堂にて懇親会を開催。40余名の方々が出席された。

### JACET English Phonetics Workshop

(英語音声学ワークショップ)

日時：2000年6月24日（土）- 25日（日）

場所：国立京都国際会館

主催：JACET 関西支部

後援：丸善(株) / ピアソン・エデュケーション  
ブリティッシュ・カウンシル

テーマ：'English phonetics: characteristics of  
connected speech'

プログラム：

Saturday 24 June (12.00 - 20.00)

- (1) Lecture: 'Dictionary pronunciation and  
connected speech'

Professor John C Wells

Head of the Department of Phonetics and  
Linguistics of University College London

- (2) Practice 1

Professor John C Wells,

Professor Jane Setter

Practice 2

- (3) Lecture: 'How to approach English pronunciation  
a personal viewpoint'

Professor Kazuhiko Matsuno,

Nagoya University of Foreign Studies

- (4) Beer Party

Sunday 25 June (10.00 - 17.50)

- (1) Lecture: 'Stress-timing, syllable-timing and  
mora-timing; rhythm in English pronunciation'

Assistant Professor Jane Setter,  
Hong Kong Polytechnic University,

- (2) Practice 3, Practice 4, Practice 5

- (3) Q and A Session

Professor John C Wells,

Professor Jane Setter

<参加者による感想>

Practice Sessions が5回あり、内容はProf. Wellsと

Prof. Setter指導によるconnected speechのグループ別実践練習。また、Question & Answer Sessionは、Prof. WellsとProf. Setterに対する質疑。講演、練習、質疑応答のセッションがバランス良く組み合わせられ、理論と実践を通してconnected speechに関するさまざまな疑問点を解決することができた。今後もこのような機会があれば是非参加したい。参加者は定員を越える70名。

(梅咲教子・帝塚山短大)

## 2000年度第1回運営委員会

日時：2000年7月8日(土)午後1時～3時

場所：摂南大学寝屋川学舎

### 1. 報告事項

#### (1) 新評議員、新研究企画委員、新幹事、新会計監査紹介

新評議員： 長谷川存古(関西大)  
橋内 武(桃山学院大)  
Sell, David(京都工繊大)  
内田聖二(奈良女子大)  
新研究企画委員：藤澤良行(大阪樟蔭女子大)  
高橋寿夫(関西大)  
山本雅代(関西学院大)  
新幹事： 梅咲教子(帝塚山短大)  
新会計監査： 長谷川明子(大阪キリスト教短大)  
小栗裕子(滋賀県立大)

#### (2) 3月25日(土)～26日(日)の全国定例理事会について

1999年度活動報告、決算報告、2000年度活動計画、予算請求がなされ、支部活動費は69万5千円となったこと、及び文学教育、口語英語の各研究会の特別研究補助費が承認されたことが報告された。

#### (3) 2000年度秋季大会について

好田 實先生(金蘭短大)が大会を前に、会場校として挨拶をされた。

#### (4) 第1回研究企画委員会について

6月1日(土)、7月8日(土)の委員会で検討された秋季大会についての報告。

#### (5) JACET English Phonetics Workshop, JACET 京都セミナー2000について

6月24、25日の両日に開催されたJACET English Phonetics Workshopは、大変好評で定員を越える約100名の参加希望者があった。会員の他、非会員、院生を含め、近畿、関東、九州等からの広範な方々の参加を得た。

JACET京都セミナー2000が2000年10月28、29日の両日に国立京都国際会館で開催される。基調講演は池上嘉

彦先生。

#### (6) その他

全国大会シンポジウム「英語教育の危機」に関西支部から原田園子先生(神戸女学院大)参加。

11月7日(火)、帝塚山大(短)においてJACET関西支部口語英語研究会による講演会開催予定。

## 2. 議題

### (1) 2001年度秋季大会について

京都府立大[京(滋)地区]において開催することに決定。

### (2) 研究会のあり方について

JACET 特別補助費の今後のあり方について検討されたが、今後も継続して検討を行う。

## 2000年度第1回談話会

日時：2000年7月8日(土)午後3時～5時

場所：摂南大学寝屋川学舎

### 第1部

講師：山本雅代(関西学院大)

演題：「バイリンガル：その評価における二極化の徴候」

### 第2部

講師：Barbara Hyde(立命館大)

演題：“The Lexical Approach – What is it, how does it work?”

第1部では、バイリンガルの社会的評価の歴史と現在の状況、バイリンガルとその社会的背景との関わりが紹介され興味深いものであった。第2部では、語彙を中心とした英語教育のあり方が示され、実践的、具体的に教室でも使えるものが紹介された。

(女井康子・四天王学院国際仏教大)

## <九州・沖縄支部>

### 運営委員会

日時：平成12年6月17日(土)

場所：西南学院大学

議題：(1)2000年全国大会実行委員会合同委員会

(2)支部運営について

(3)支部紀要No.5編集について

(4)ヨナム英語教育学会(10/28)

日時：平成12年7月22日（土）

場所：西南学院大学

議題：(1)2000年全国大会実行委員会合同委員会

(2)支部紀要（投稿規定／投稿者の費用負担）

(3) ヨンナム英語教育学会(10/28)への代表者  
派遣

(4) 英語実態調査アンケート

日時：平成12年8月25日（金）

場所：西南学院大学

議題：(1) 2000年全国大会実行委員会合同委員会

(2) 2000年度支部総会

(3) 支部紀要の編集

(4) ヨンナム英語教育学会(10/28)への派遣  
代表者の決定

学術講演会：

日本英語音声学会九州沖縄支部主催への協賛

日時：7月8日（土）15：00～17：00

会場：西南学院大学

講師：Lee, Hyn Bok

韓国ソウル国立大学教授

演題：“What is Wrong with Japanese English?”

—Rhythmic Difficulties for  
Japanese—

(武井俊洋・西南学院大)

## 本部情報交換会

[6月17日(土)]

2000年度 SEAMEO RELC

International Seminar

2000年4月17日(月)から19日(水)の3日間、シンガポールのRELCセンターにて、第35回東南アジア文部大臣機構(SEAMEO)のRELC International Seminarが開催された。今年度も協定に基づいて、豊田昌倫(京都大学)と田辺洋二(早稲田大学)がJACETから公式に参加した。

今年のテーマはlanguage Curriculum and Instruction in Multicultural Societyで、各国の英語教育カリキュラムの発表が目立った。全体講演者はRod Ellis(New Zealand)とJohn Joseph(UK)。他に招待講演者としてAllan Lade (Australia)、R. Nagappan (Malaysia)、Alistair Pennycook (Australia)、Terresa Pica(USA)、M. A. Tatlonghari (Philippines)、M. Tickoo (India)などが参加した。毎年恒例の学会であり、東南アジアの言語学者や英語教育関係者の情報交換も盛んで、会場に熱気を感じた。

田辺にも招待講演者として参加要請があり、“TEFL in Primary Education and the Current Educational Reforms in Japan”と題して40分間講演を行った。内容は、近年の教育改革を明治維新、戦後、四六答申、臨教審等の歴史の中に位置づけ、どのような状況で総合的な学習の時間が生まれ、公立小学校に英会話が位置づけられたかを論じた。

(文中敬称略)

(田辺洋二・早稲田大)

[7月22日(土)]

## SLA研究会より出版計画の中間報告

SLA研究会では発足以来、SLA研究と外国語教育との融合を図って、読書会、『英語教育』に連載、JACET全国大会にて発表、講演会、AILA'99におけるシンポジウム、といくつかのプロジェクトに取り組んできたが、これらの活動の報告を兼ね、SLA研究の基本的文献と最近の動向を示す文献を紹介しようと、文献収集と解説文執筆のプロジェクトに取り組んできた。今回はその中間報告である。

まず、研究会代表佐野富士子からSLA研究の分野の概要と最近の動向について、AILA'99でのシンポジウムの模様を記録したビデオを上映しながら説明し、プロジェクトの趣旨、概要、予想される読者層などについて説明した。そのあと、各章の担当者から、社会言語学(小林めぐみ)、語用論(足利俊彦、辻岡宏子)、バイリンガリズム(飯田深雪)、テストニング(藤田智子)、ライティング(佐野富士子)の領域でどこまで進んでいるのか説明した。最後に活発な意見交換が行われ、役員の先生がたからは出版のためのアドバイスも多数寄せられた。JACET沖縄大会で販売できるよう校正作業を急ぎたい。

なお、AILA'99の記録ビデオの貸出しについては奥田(大東文化大学 Email: sokuda@ic.daito.ac.jp)まで

ご連絡下さい。

(佐野富七子・駿河台大)

## 月例研究報告

[5月発表]

JACET 言語政策研究会

### 『英語圏諸国における言語政策 その2』

#### 米国における少数言語話者の言語権

##### — ハワイ語復権運動の現況 —

本発表の目的は、ハワイ語衰退の原因及び復権運動の現況を報告すると共に、英語の絶対的優位の中で、米国の少数言語話者が言語権を主張することの含意を探るものである。

ハワイ語衰退の原因としては、(1) 先住民族人口の激減(1778年の推定人口30万が1892年には4万人)、(2) ハワイ王朝の言語政策(指導層が過度に英語へ傾倒)、(3) 米国による王朝転覆(行政・教育用語がハワイ語から英語へ)などが挙げられる。

ハワイ語復権運動の推進力としては、(1) 1970年代のハワイアン・ルネッサンス(エスニック・リバイバル運動に伴う主権回復運動、その成果としてハワイ語の州公用語化)、(2) マオリの影響(マオリ語のみで保育するコハンガ・レオ、マオリ語を教育言語とする公立小学校クラ・カウパニ・マオリがハワイに紹介され、プーナナ・レオとクラ・カイアプニ・ハワイイがハワイ各島に誕生)が考えられる。

しかし、1990年代に入って、ハワイ語復権運動に否定的な考え方が浮上してきた。(1) 本土における英語公用語化運動の波及(英語の求心力に依存して体制維持を図ろうとする動き)、(2) 他のエスニック・グループによるresentment表明(ハワイ経済の落ち込みに比例して、先住民族優遇策への批判が繰り出)などが顕著である。

2000年3月24日から3日間、カウアイ島のカバア小学校で第2回カイアプニ・ハワイイ支援集会(Paipai Kaia-puni II)が開催され、ハワイ語復権運動に携わる

教師、親、校長、教育委員、支援グループなど150名が参加した。討議のキーワードになったのは kuleana (責任) というハワイ語で、21世紀を生きる子どもたちに対する責任を保証するために、いかに協力体制を築いていくべきかが話し合われた。カリキュラムや教材の開発、予算獲得、スクールバスの確保等、さまざまな問題が論じられた。

英語の「極集中状況」に象徴される「大言語主義」は、社会的な小言語を不可視の状態にする恐れがある。言語の一元化が持つ不平等性に対抗する「多言語主義」に、英語教育関係者は更なる関心を示すべきであろう。

(松原好次・湘南国際女子短期大)

#### 豪国のLOTE教育政策から学ぶこと

LOTE(Languages Other Than English)とは文字通り豪国の優勢言語である英語以外の言語を指す。本発表はこれらが豪国の公教育においてどのような取り扱いを受けてきたのかを概観し、日本の外国語教育に対する示唆を考察したものである。

言語権拡充の視点から、豪国の言語政策を概観すれば、1970年代中期までの問題としての言語、または同化の段階、1970年代中期から始まる権利としての言語、または多文化主義の段階、1990年代からの資源としての言語、または経済的合理主義の段階の3時期に区分されるという見方がある。豪言語政策史上で主要文書は、Senate(1984)、Lo Bianco(1987)、Dawkins(1991)であると言えるが、文書作成の過程では言語学者集団等による草根運動が見られた。また豪国は米国とは異なり、LOTEを個人や国家の人的資源と見る新しい価値観の下に多言語多文化主義政策を推進している。

LOTE教育の実際面では、Year 12の25%が少なくとも1つのLOTEを学習することを目標としたのだが、1993年時点では、日本語を除いて学習者の減少傾向が窺われている。現在、豪国のLOTE教育政策は、多文化主義推進と豪国を取り巻く諸国との経済的友好関係促進という2つの志向性を持つものと指摘できよう。

Lo Bianco(1987)はLOTEのうちで、長短期の移民史を有する9つの言語を重要言語として提示した。このような視点は現在の日本の外国語教育には見られない。学習指導要領に代表されるように、日本では外国語=英語観が圧倒的であるが、その危うさはないだろうか。外国語選択に関して、鈴木(1999)は学習する言語の性格による分類として目的、手段、交流の3種類を挙げている。欧



州の外国語教育を概観した限りでは、近隣の言語を外国語科目としているものが圧倒的であるが、区域内のコミュニケーション促進という目的だけでよいのであろうか。日本では、1970年代以後実際に役立つ英語力が要請されている。国際的優勢語である英語を中心とした global villageでの生存のためには、これは当然である。しかし英語教師が従事しているのは英語を含めた外国語教育である。外国語教師は「公教育における外国語選択の視点とは何か」という問いを持ち続けることが重要と考える。また、西尾(1996)の提案に見られるような、言語政策を総合的に討議する場の整備が要請されている。

(三好重仁・東京電機大)

った。そして第二言語教育についてはウェリントン郊外にある高等学校の事例を取り上げ、その実態について報告すると共に、1995年から1998年にかけて行われた第二言語学習プロジェクトに対する評価の報告内容から明らかになった問題点・課題について論じた。

最後に、ニュージーランドにおける言語政策・言語教育政策から、今後の日本の外国語教育の在り方を考える上で参考となる点を示した。その際の参考資料として、発表者が1999年に行った「日本における外国語教育の在り方に関する意識」に関するアンケート調査の、因子分析による統計処理を行った結果を報告した。

(岡戸浩子・名古屋大)

## ニュージーランドにおける言語政策の 現状と問題点—言語教育政策を中心として

[6月発表]

### 『生成文法の現状』

根本貴行 (青山学院大学)

ニュージーランドは約380万人の人口を有している。民族別人口構成比をみると、ヨーロッパ系71.7%、マオリ系14.5%、太平洋島嶼系4.8% (1996年現在) となっており、その他ではアジア系住民の増加が近年、特に目立ってきている。この国の公用語は英語とマオリ語である。

まず、マオリ語の復権運動について、1840年のワイタング条約下における植民地化の歴史を始めとして、1987年にマオリ言語法においてマオリ語が公用語として認められるに至るまでを概観した。现阶段ではマオリ語を流暢に使用できる者の数はさほど多くないが、行政側も1990年からマオリ語の再活性化を積極的に進める方針を示している。

次に、言語政策の現状については、1992年に出版されたAoreareo: Speaking for Ourselvesの内容を中心として考察した。この報告書は、近年の民族別人口構成の変化などの社会的背景から生じる言語の多様性を考慮した上で言語問題に取り組むという必要性から出されたものである。ここでは、優先的に施策されるべきであるとしている6項目が示されている。

さらには、言語教育政策の現状に触れた。第七に、Maori Medium Educationに関してはマオリ語によるイメージ・スクールに焦点を当てたが、問題点の一つに、教育言語としてのマオリ語の地位が上げられる。マオリ語と英語の等しい地位を認める見方と、その一方で、言語の有用性の点においてマオリ語をあまり重要視しない見方があり、教員間でも、また世間一般でもマオリ語に対する捉え方には大きな相違があることが明らかにな

理論言語学としての英語学研究の知識が、多彩を極めている応用言語学研究にとってどれほど有効であるのかは、簡単に判断を示すことがむづかしい問題である。JACETのなかには、大学院生時代まで生成文法を学んだことはあっても、現在では生成文法から完全に離れている会員も多くいることであろう。本例会研究会では、生成文法統語論を専門分野としている根本貴行氏に、生成文法の歴史と現在の研究動向を解説していただき、理解を深めることができた。以下に、根本氏の発表内容の概観を示しておきたい。

生成文法は、これまでに幾度かの理論的枠組みの変更を伴って現在に至っている。1990年代に入ってからミニマリスト・プログラムでは、これまで以上に言語の本質にせまっている。根本氏は、まずはじめにアメリカ構造主義的な方法論から、変形操作を取り入れた文法モデルに移行していった過程を振り返ることから始めた。生成文法における「文法」の概念と、その理論背景や文法が明らかにならなければならない目標が明確にされた。理想化された話者の想定や、統語論の自立性、母語獲得、普遍文法、説明的妥当性などが解説された。

次に、生成文法がたどった初期理論からの変遷を振り返った。初期理論から改訂拡大標準理論までにかけての構文ごとの変形規則や局所性を捉えるうえでの制限と制約の体系や、文の文法性に対する予測性が解説された。

最後に言及したGB理論以降、1990年代のミニマリスト・プログラムの文法モデルでは、これまでの枠組みで仮定されていた原理体系や規則体系を限られたものに

限定し、また原理、規則上の余剰性を排除することによって、文法の生成力を保ったまま説明的妥当性を目指す努力が今も試みられているとのことであった。また、脳科学や失語症といった分野からも生成文法が注目されている現状をこの発表から感じ取ることができた。

参加者からの質問が多く、活気のある議論が展開された。

(中尾正史・桐朋学園大学短大)

## Applications of Word Associations in Language Testing

Ms. Tess Fitzpatrick

Centre for Applied Language Studies  
University of Wales, Swansea

There are many occasions where teachers need to assess the language ability or the language potential of their learners. In her department they have a special interest in trying to devise computer-based tests, which are quick and easy to use for both the teacher and the student. They are also interested in the potential applications of word association techniques in L2 testing.

Her paper discussed the design and application of a new test of language learners' productive vocabulary. The test used word association techniques to explore the learner's active L2 lexicon, requiring subjects to produce a set of single word responses to a series of prompt words. The set of words produced by each subject was then processed, and an association profile was produced for each subject, based on the number of infrequent words they produce.

An indication of productive vocabulary size is extremely useful to the language teacher, from both a diagnostic and a proficiency assessment point of view. Experiments to determine the validity and reliability of the Lex30 test have produced encouraging results. The test

described may provide a very economical and rapid way of measuring productive vocabulary within the practical context of the language learning environment.

(Yuji Nakamura・Tokyo Keizai Univ.)

## 研究会開催予定

## JACET KYOTO SEMINAR 2000

Host : JACET Kansai Chapter

(大学英語教育学会)関西支部

Sponsors : Maruzen,

Cambridge University Press

Oxford University Press

Pearson Education

The British Council

Date and Time : Oct. 28 (Sat), 2000(10:30-19:00)

Oct. 29 (Sun) (9:30-17:00)

Place : Kyoto International Hall

(Takaragaike, Sakyo-ku, Kyoto City)

国立京都国際会館

(京都市左京区宝ヶ池 Tel.075-705-1284)

Theme : 'English Dictionaries

—Today and Tomorrow'

Participation Fee:

Members and Students ¥10,000

Others ¥13,000

(including reception in the evening)

Send money at Post Office to 00990-8-80476

Daigaku Eigo Kyoiku Gakkai Kansai Shibu or

大学英語教育学会関西支部

Registration up to 70 people

(First-come, first-served basis)

Deadline: October 18 (Wed).

We will not confirm receipt of payment if your registration is accepted as within capacity.

Contact: Prof. M. Toyota at Kyoto Univ. Graduate School

Tel: 075-753-2802 Fax: 075-761-0692

E-mail: mtoyota@ip.media.kyoto-u.ac.jp

Prof. Tokumi Kodama (児玉徳美),  
Ritsumeikan University

Programme:

Sat. 28 October

9.30-10.30 Registration

10.30-10.40 Opening Remarks

10:40-12:00 'English Dictionaries in Japan -  
Past, Present and Future'

Prof. Yoshihiko Ikegami, (池上嘉彦)  
Showa Women's Univ.

12.00-14.00 Lunch

14.00-15.00

'What's the Definition of Dictionary?'

Mr. Stephen Bullon,  
Managing Editor, Longman Dictionaries,  
Pearson Education

15.10-15.40

'Meaning in the Dictionary'

Prof. Kensei Sugiyama, (菅山謙正)  
Kobe City Univ. of Foreign Studies

15.40-16.30 Tea

16.30-17.30 'A Dictionary for Journalists'

Ms. Miki Ebara (榎原美樹),  
NHK TV. Chief Announcer

18.00-19.30 Reception

Sunday 29 October

9.30-10.30 Title to be confirmed

Ms. Salley Wehmeier,  
Editor of the Sixth Edition of  
Oxford Advanced Learner's  
Dictionary, Oxford Univ. Press

10.30-11.00 Coffee

11.00-12.00 'Grammar and Frequency in the  
Dictionary'

Prof. Geoffrey N. Leech,  
Univ. of Lancaster

12.00-13.00 Lunch

13.00-14.00 'How can you get the most out of  
a learner's dictionary on CD-ROM?'

Mr. Patrick Gillard,  
Senior Commissioning Editor,  
ELT Dictionaries & References,  
Cambridge University Press

14.10-14.40 'Usage in the Dictionary'

14.40-15.30 Tea

15.30-16.50 Colloquium:

'An Ideal ELT Dictionary for the Japanese'

Mr. Stephen Bullon,

Ms. Sally Wehmeier,

Mr. Patrick Gillard,

Prof. Yoshihiko Ikegami (池上嘉彦)

16.50-17.00 Closing Remarks

## 国際辞書学セミナー開催のご案内

辞書学のメッカである英国の Exeter 大学から3名の講師を招聘してセミナーを開きます。関心のある方はぜひ下記にお問い合わせいただきたくお願い致します。

開催期間: 2001年3月27日(火) - 29日(木)

(なお、前日の26日(月)には英語辞書研究会の「第4回ワークショップ: 英語の辞書」を予定しております。)

場所: 清泉女子大学

講師: Dr. Reinhard Hartmann

Dr. Tom McArthur

Mr. Michael Rundell

参加費: 30,000円 (早期申込みは 27,000円)

主催: 国際辞書学セミナー実行委員会

協賛: JACET 英語辞書研究会

問合せ先: 清泉女子大学 大杉正明研究室

E-mail: ohsugi@seisen-u.ac.jp

FAX: 03-3447-5493

<http://www.e.chiba-u.ac.jp/~junkot/Interlex/>

(このHPに詳しい説明があります。)

(村田 年・千葉大)

## JACET 月例研究会 2000 年度後期予定

時間: 午後2時半~5時

会場: 東京電機大学 1 1 号館 1 6 階 1 6 0 1 教室

(最寄駅はJR中央線御茶ノ水駅、都営新宿線小川町駅、千代田線新御茶ノ水駅、丸の内線淡路町駅で出口はB7が便利です。)

参加費: 会員・学生500円、非会員1,000円

発表予定者 (敬称略) とタイトル

10月28日(土) (この日のみ7号館4階7401教室)  
「大学生の多読指導に関するアクション・リサーチ」  
飯田毅 (同志社女子大学)  
「スピーキング能力の測定と評価」  
中村優治 (東京経済大学)

11月25日(土)  
「語学教育における社会言語学の役割—L1バリエーションの数量的分析をいかに語学教育に応用するか」  
小林めぐみ (立教大学)  
「言語とジェンダー: Dominance理論とDifference理論」  
薬師京子 (目白大学)

2001年

2月24日(土)  
シンポジウム (仮題) 「国際理解教育に対する対応」  
司会: 伊藤克敏 (神奈川大学)  
パネリスト・タイトルは準備中

3月30日(金)

時刻 (未定)  
場所 東京電機大学 11号館16階1601教室 (予定)  
講演者 Tom McArthur (English Today Editor)  
タイトル 未定  
(二好重仁・東京電機大)

教員公募

Position Available

Edogawa Women's Junior College  
(Next year as Edogawa Junior College)

EWJC wants to recruit one or two qualified part-time instructors with a degree in TESOL. Teaching assignment starts on April 1, 2001. They are asked to come to school twice a week. Candidates should be no more than 40 years of age. Send your recent photo and your resume with a suitable amount of professional/academic experience and a demonstrated record of achievement in their academic specialty.

Write to the following address before October 31, 2000, enclosing a stamped, self-addressed envelope:  
English Faculty Recruitment  
Edogawa Women's Junior College  
474 Komaki, Nagareyama, Chiba Pref. 270-0198  
No inquiries by telephone, fax, or e-mail will be accepted.

編集: 広報通信委員会

(担当理事: 田中、委員長: 加藤)

今年の夏は、暑い日が長く続きましたが、新学期が始まり、皆様、秋のすがすがしい気分で、授業に、また研究に、戻られたことと存じます。9月号に原稿をお寄せ下さいました先生方、お忙しい中、ありがとうございました。今回の編集は、不慣れな者が担当しましたため、ご迷惑をおかけしたことも多いのではないかと存じますが、会員の皆様の情報交換の場としてお読みいただければ幸いです。(9月号担当: 岡田、濱岡)

Table of Contents

Foreword (Takehiko Kurihara) ..... 1  
Report from President (Ikuo Koike) ..... 2  
Report from JACET Office (Hiromi Kobayashi) ..... 2  
Chapter Reports ..... 2  
Reports from the Headquarter ..... 7  
Monthly Meeting Reports ..... 8  
Monthly Meeting Information ..... 10  
Position Available ..... 12

2000年9月30日発行

発行者 大学英語教育学会 (JACET)

代表者 小池 生夫

発行所 〒162-0831 東京都新宿区横与町55

電話 (03) 3268 9686

FAX (03) 3268 9695

<http://www.jacet.org/>

印刷所 〒228-0021 座間市緑ヶ丘3-46-12

有限会社 タナカ企画

電話 (046) 251 5775